新左翼

1969年
6月5日
第29号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円千共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2—10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

記事紹介

二・三面 チェコスロバキア＝資本主義と社会主義 ポール・M・スイージー

四面 大学立法粉砕、5・23統一行動〝堕ちよどこまでも堕ちよ〟＝大阪市教委汚職について 4・28逮捕者を解雇＝「守る会」結成し三菱電機と対決

「出入国管理法案」粉砕を

6・1全国統一行動

関西集会に千五百

神戸入管事務所へデモ

六月一日、全国一せいに東京、横浜をはじめとする各地の出入国管理事務所に対して、今国会に提出されている出入国管理法案を阻止するためデモがおこなわれたが、関西ではチョッパリの会の呼びかけで作られた出入国管理法粉砕関西実行委員会の主催で、神戸出入国管理事務所にむけておこなわれた。

午後一時から神戸市役所前でひらかれた出入国管理法粉砕全関西総決起集会には、京都・大阪・和歌山・兵庫等各地の青年労働者と学生約一千五百名が参加した。集会では、神戸・豊能・北摂・神戸地区の各反戦青年委員会と関西地区反戦連絡会議、京都府学連、全学連（中核派）、神大・京大の各（全共闘、関西学生解放戦線、二法案粉砕準備青年共闘会議、日中（正統）大阪府本部の各代表が演説し、全国実行委員会の代表は、「この集会を契機に、帝国主義の侵略と闘い、アジア人民の真の反帝統一戦線をかちとるための新たな闘いが始まったことを確認し、六・八大村収容所デモを成功させよう」と訴えた。

神戸市役所前でひらかれた全関西集会のもよう

各代表は、出入国管理法案が外国人とともに、朝鮮、中国人民に対する日本政府の無制限なファッショ的弾圧を許したものであり、これは日本帝国主義の侵略と植民地主義体制のあらわれであり、日本人民はこのような侵略と反革命の弾圧体制を、破防法攻撃、大学治安立法とともに、安保体制の実体的基礎を強化しようとするもので絶対にこれを粉砕しなければならない、と訴えた。

集会後、神戸市内の目抜き通りを行進し、神戸出入国管理事務所近くをとおり、大倉山公園で解散した。神戸出入国管理事務所の周辺には多数の完全武装の機動隊を配置しただけでなく、管理事務所から五十mもはなれたところをデモコースに指定するなど、官憲は出入国管理そのものの不当性が糾弾されるのを極度におそれていた。

このデモに多数の機動隊をくりだした官憲は、並進規制をしただけでなく排発を加え、解散地点の大倉山公園にまで乱入し検行を働き三十日午後六時から、扇町公園でひらかれ、二千五百名の青年労働者と学生が参加した。この集会では、全大阪反戦をはじめ、全電通市職、全逓、北摂、関西地区反戦などの反戦青年委員会の代表、全国金属大阪地本青年部の代表、大阪沖縄連帯の会の代表などがそれぞれ発言し、沖縄返還交渉のための愛知外相訪米の政治意図を一致して糾弾して次のようにのべた。

一、佐藤自民党政府の沖縄返還交渉は、「自由使用」によって、米軍の沖縄における特権を認めるだけでなく、安保条約の事前協議条項を死文化して、その特権を本土にまで拡大しようとしている。しかもこれは本来条約改訂にもかかわらず、政府は国民の眼を欺んでごまかそうとしている。

一、海外侵略をたくらむ日本帝国主義は、沖縄を自衛隊の基地にしここを侵略拠点にして、海外侵略をするために、大々的な軍備拡張をおこなおうとしている。

一、これらの海外侵略体制を確立するために、これに反対する青年労働者と学生の闘争を破防法をもって、ファッショ的弾圧をおこなっている。

一、沖縄返還交渉を突破口にして安保自動延長をたくらむ政府に対して、政治ストライキを上から組織することによって粉砕しなければならない。

集会後中央郵便局前までデモ行進をおこない八時すぎ散会した。このとき、二人の労働者が不当に逮捕された。

機関助士廃止に反対して二十九日から全国でストライキに入っている動力車労組を支援するためにデモが終ってから、富原と吹田の両操車場に集合した。ここで、反戦青年委員会のメンバーは、総評がひらいた支援集会に参加し、警察機動隊と鉄道公安官がとりまく操車場のなかで、ストライキに突入する動力車労組を防衛するために、雨中にもかかわらず徹夜でピケに参加した。

尼崎市戦後史刊行実現・言論弾圧抗議集会（仮称）

六月十一日午後六時 尼崎労働福祉会館（阪神尼崎駅より北へ徒歩五分）

井上京大教授と師岡元立命大講師が講演

「デモの思想」とは

反万国博討論会開く

小田実氏講演

六月二十日午後六時から大阪中之島公会堂で、反戦のための万国博協会主催による「万国博とわれわれの理想」との題で、講演と討論会が開かれた。

これは、現在、政府が国際的行事として「人類の進歩と調和」という美名のもとに、七十年安保自動延長をめざして権力強化のための万国博に反対する人たちによって開かれたものである。

まず、司会の山田宗睦氏から「反万博の思想的背景」について問題提起があり、つぎに神戸の森伝導所の伝導牧師である笠原牧師が「右翼化しているキリスト教界は真のキリスト教ではなく、真のキリスト教は常に権力との闘いの中から生れてくる」との講演があった。

最後に小田実氏が「デモの思想」について講演した。

しかし、残念ながら大討論会は発言者がなく不成功に終ったが、この講演で「反万国博」の思想が具体的に明解になったことは事実であり、それによってこの大会は成功であった。

大会が終了した後〝ASPAC粉砕、万国博粉砕、ベトナム戦争反対〟等のシュプレヒコールで約一千五百名の人たちによって、デモが中之島公会堂から大阪駅まで官憲の厳しい弾圧にひるまず、元気一杯おこなわれた。

小田実氏の講演はあらまし次のとおり。

一、権力を表面的に見ると実に安っぽく見えるが、しかし、そんなに安っぽくはなく、もっとも強力で、一見その機構に入ると個人の力ではどうすることも出来ないものである。私が東大に在学していた時に機せずして、現在東大総長である加藤総長を知る事があったが彼は実に優秀であった。このように実際優秀である人間が、今の官僚機構をきめこまかに編成しているのであり、それをこわすのは簡単なものではない。

一、われわれがこれらの官僚機構と闘おうとするなら、権力を構成している官僚の本質を深いところで見つけ出すことである。われわれはそれに対して素朴な型で闘うほか以外にない。現代の人間はそれぞれに一つのピラミッドのような三角形をもっている。それは、三角形の頂点に自分が存在し、他はその底辺に存在するという構神ともう一つは横へのつながりである。官僚機構はこのピラミッドを巨大化したものであり、その仕事が分業化され、その仕事の範囲でしか生きられない人間である。だが逆に横のつながりは、素朴な人間の感情の中から出てくる。それが「デモの思想」であると私は考える。

一、人がピラミッド的考えをすてて、デモにでた時、それは、不安で孤独なものである。その中でデモ隊の隊列でとなり同志が理解するのは、学歴でも職業でもなく、ただ一つ「この人は僕と同じくべ

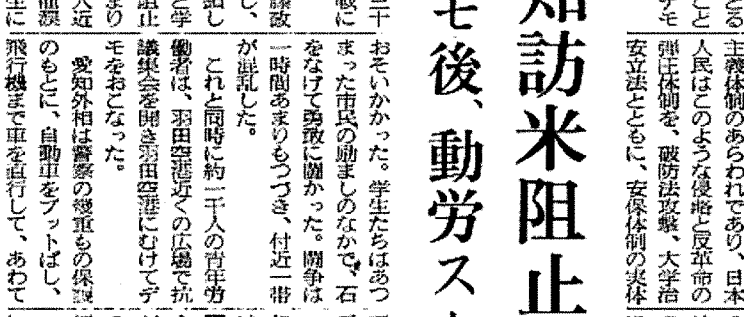
愛知訪米阻止を

デモ後、動労スト防衛へ

大阪

愛知訪米に反対する闘争は三十一日、全国各地で全学連、反戦によって激しくたたかわれた。

東京の羽田空港周辺に、佐藤政府は五千人の武装警官を配置し、空港へ通ずる道路を厳重に封鎖した。しかし多数の青年労働者と学生は羽田空港周辺で、激しい阻止闘争をおこなった。五百人あまりの学生は国鉄蒲田駅前で二千人近い武装警官と闘った。警察は催涙弾を発射し警棒をふるって学生に



おそいかかった。学生たちはあって飛行機にとびのって、こっそりまった市民の励ましのなかで、石アメリカに旅立った。

をなげて勇敢に闘かった。闘争は一時間あまりもつづき、付近一帯が混乱した。

これと同時に約二千人の青年労働者は、羽田空港近くの広場で抗議集会を開き羽田空港にむけてデモをおこなった。

愛知外相は警察の厳重もの保護のもとに、自動車をブットばし、飛行機まで車を直行して、あわて

愛知訪米の前日、三十日には、午後、五千人の青年労働者と学生は、大雨をついて東京の日比谷公園で、訪米抗議集会を開いた。集会後、シュプレヒコールを叫びながら、官都の中心部を、完全武装の機動隊の弾圧をけって、元気一杯デモ行進した。

全大阪反戦青年委員会主催の愛知訪米阻止全大阪青年決起集会は

「新左翼」購読申込みと読者紹介を

下の欄に住所氏名をかいて、新左翼社までお送り下さい。送金には振替を御利用下さい。

氏名	住所

送り先 大阪市大淀区本庄川崎町2—10 トミヤビル 新左翼社

新左翼東京支社設立カンパにご協力を！

昨年八月発行以来「新左翼」は読者のご支持をえて、発展してきました。七〇年安保を来年にひかえ、反戦青年委員会と全学連に結集する戦闘的労働者・学生の闘いは、日本帝国主義支配者たちの肝を冷させています。分裂している新左翼諸党派は闘いのなかで、真の革命的翼と反革命的翼の分化が徐々に始まっており、革命的翼は統一の方向にむかってすすみつつあります。

「新左翼」は党派から自立した反戦青年委員会運動を先進的に形成してきた関西の地で発行されました。しかし、全国的政治闘争の中心である首都＝東京の地に「新左翼」東京支社をおくことは、現在の政治情勢のもとで、決定的に重要な時期になっております。

新左翼社は、読者と協力委員会の皆さんのご援助によって、東京支社をぜひ設立したいと考えております。

東京支社設立のための資金カンパに、読者と協力委員会、その他多くの皆さんの心からのご協力をお願いします。

目標額 三十万円
期日 六月三十日

新左翼社
新左翼協力委員会

チェコスロバキア

資本主義と社会主義

ポール・M・スイージー

辻褄あわぬ ソ連の口実

ソ連は彼らのチェコへの侵入を反革命的情況が進行中であり、もし介入しなければチェコは資本主義に逆行し、帝国主義陣営に合流するところであった、という論理で正当化している。この立場は介入支持もふくめて、国際的左翼の一部によっても擁護された。きわだっていたのはキューバ革命の指導部を代表したフィデル・カストロの賛成意見である。

一方発現した資本主義国の左翼のほとんどからは、全く反対のテーゼが提出された。それはチェコが真正の民主的社会主義に進みつつあったのであって、ソ連の干渉は帝国主義とか社会主義とかの問題でなく、東欧ブロックに対する共産党の権威的支配への脅威と考えられるような、民主化過程の抑止を目的としたものだというのである。

ソ連の論旨の最大の弱点は、反革命的情況が進展しつつあると主張する点にある。むしろ逆に現存の体制は、過去八カ月の民主的改革によって、かなり安定し強化されてきているのである。これらの改革は大体において、体制の政治的上部構造に限定され、どうしてもその基本性格を変えることはできなかった。脅威となりつつあったのは反革命ではなく、改革を保証し、その改革を実施する新しい指導者をしっかり保護することになると思われるチェコ共産党会議であった。このような情況は明らかにソ連の侵入の標的が「改革」であったという見方への強い支えとなるものである。そして八月二十一日以来の事件は、これと逆のことを何も証明していない。

資本主義化 三つの要因

しかし現体制の変革でなく強化が議題になっていたという事実から、チェコが資本主義の方向に移行しているということを意味しない。資本主義への傾向はすでに現体制のなかに打ちたてられている。企業自体による企業管理、市場を通じての調整、物質的刺激への依拠――この三つの要因が一緒になると、誰がなんと呼ぼうと、資本主義のように機能するひとつの経済秩序へと赴く強い傾向を不可避的に進行させるのである。

たしかにあるマルキストは、生産手段の私有が法制化されないかぎり、その社会は資本主義とはいえないと主張している。たとえば第四インターの論文は、チェコ事件についてのカストロの論文を否定し、図式的に「資本主義復活の危険は……社会的諸力が資本家的所有の再建を力でおしつけるのに十分なほどの結集力をもつようになった時に初めて生れてくる」とのべている。（「インターコンチネンタル・プレス」九月一六日七六六頁）

これは法律上のカテゴリーを実際の生産関係と混同することになる。もし企業が少グループごとに市場のための商品をつうじて、利潤を極大化しようという見地で運営されるなら、諸君は資本主義の本質的な生産と階級関係をもつことになる。適当な法的形態はそのあとにやってくるが、歴史的背景からみれば、それらには何等「個人財産」とレッテルが張られるようなものは含まれないだろう。またこれは全くの観念的なごまかしというわけでもない。マルクスが百年も前に株式会社について書いたことを思い起こしてみよう。

それ自体として社会主義的生産様式の上に立ち、かつ生産手段及び労働力の社会的集積を前提とする資本が、ここでは直接に、個人資本との対立における社会資本（直接に結合した諸個人の資本）の形態を与えられ、そしてその諸企業は個人企業に対して社会企業として現われる。それは資本主義生産様式そのものの限界内における、私的所有としての資本の止揚である。（「資本論」第三巻　岩波文庫版第十分冊一八一頁）

もし個人企業の古い明確な概念が株式会社の台頭で、すでに非常に複雑化したとしたら、現在のような多国籍企業と巨大な国家所有の時代では、この概念はますます複雑なものになっていると考えてよい。たとえば伊仏両国では、国家は直接あるいは国営企業を通じて、生産手段の尨大な部分を所有している――明らかに個人的所有ではないが、資本家所有の一形態であることはたしかだ。そしてさらに将来別の新しい形態の資本家所有の出現を覚悟しなければならないと考えて間違いはなさそうである。

チェコのカルロビバリで、ソ連戦勝記念のソ連兵士像を倒し、火をつける若者たち

侵入したソ連軍戦車

チェコでは上述の三つの形態が完全に成長しているとはいえない。体制はまだしばしば「市場社会主義」と呼ばれるものと、スターリン時代ソ連に起源を持ち、第二次大戦後ソ連ブロックに輸出された一種の中央集権的管理との混合物である。

「市場社会主義」という言葉自体自己矛盾的である。市場は資本主義社会の中央機関であり、社会主義は盲目的自然発生主義に対するのに、意識的な管理を代替物とする社会である。だからといってこの言葉が不適当であることを意味しない。その言葉が示す現象自体が自己矛盾的である。そして当然この内部矛盾が市場社会主義を資本主義に導くものなのである。不幸にもこういう重要な現象についてのマルキストの分析のレベルは、米国のみでなく、国際的左翼の間でも絶望的に低いといわざるをえない。資本主義については表面を深く掘り起して、下に横たわる関係を暴露するという手順を学んだ人も、社会主義社会については、現象の追求で滞足してしまう。もちろんこの非の大部分は社会主義社会に帰せらるできであろう。例外なくすべての社会主義国は、彼ら自身の現実について厳密な科学的分析を回避している。

しかし重要なことは現在の混合物の正確な構成でなく、体制の動く方向であり、明らかに（a）市場要素のウェイトが少なくとも最近の五年間成長してきた（b）過去八カ月の自由化改革の目的のひとつがチェコ経済の市場面でのより一層の能率化に対する障害物の除去にあったことは事実である。

ビジネスウィークの簡潔な要約では、ドブチェク体制は「新聞を自由化し、より多く個人の自由を許し、活気のないチェコの経済を活気づける諸もろの資本家的技法を適用した」（八月二十四日付）

最近の一期間のもっとも目立った影響力をもった人物の一人が、ドブチェク体制の副首相に昇進したオタ・シク教授であったことは偶然ではない。シクはソ連の経済学者リーベルマンについで、多分もっともよく知られた市場社会主義の理論家であり、提唱者であった。彼は一九六四年来採用され、ためらいながら実行されている経済改革プログラムの主要な作成者であった。

ユーゴで試験 済みの「改革」

市場社会主義の方向に他国に先がけて遠くまで走ったのはユーゴスラビアであったから、チェコに適用されるコースがどういう結果になるかを見たいと思えば、ユーゴスラビアを観察すべきだろう。ユーゴの市場への転換は一九四八年のコミンフォルムとの訣別にまでさかのぼる。したがってわれわれはこの国で五年ではなく、二十年の学ぶに足る実験をもっているのだ。ユーゴの発展についての正確なリポートと必要な結論を、自分自身でやれる事がらについては社会主義者の側が示すべきだろうが、むしろ残念なことにそれを行なったのは今までのところ、資本家的観察者と分析者であることを認めざるをえない。一九六八年八月十九日の「ニューヨーク・タイムズ」の経済欄に現われたたベオグラードからの通信がある。

西欧の資本はユーゴスラビアに重要な足場を築いてきた。そしてかつては農業国であった国を新しい産業国家に転換させることを援助している。イタリアの自動車大企業フィアットやタイム社の子会社であるニューヨーク市の印刷開発会社のような巨大企業による投資は、資本の新しい投資先への強欲な要求と市場経済と、その付随物の大部分を受け入れようとする共産圏の意識的な計画を物語るものである。

経済活動に通じているベオグラードの公務員と話してみると彼らには、この道を他の東欧諸国もあとを追うだろうという固い確信のあることがわかる。

ユーゴは西側資本にとってショーウインドウであると同時に東欧における先達でもある。ここで操業している西側の会社は一たん東欧のどこかでマーケットが開かれたとき、巨大な競争力を発揮するであろう。企業を国家の管理から企業の管理へ移行させ、自由市場の原理と利潤刺激の導入という改革の線にそって、ユーゴは外国資本をひきつけるために、数年前革命的な法律を公布した。

制定の際、西側資本が経済のキー・ポイントを支配するかもしれないという恐怖からの強い反対があった。

これに対する保護として、外国資本はユーゴの企業で四十九%以上の株式をうることを禁止されている。

ユーゴの企業は労働者によって、労働委員会を通じてコントロールされる。労働委員会は経理士や生産技術者や企業を運営する専門家を指名する。

最初外国の会社は彼らの弱い立場―と彼らは感じた―のために投下資本の直接支配を許さないだろうという理由から、進出に乗気でなかった。

西側のビジネスマンのためにもたれたセミナーで、ユーゴの公務員は苦しそうに、これについての逃げ道は、たとえば製造コストの管理統制権を外国投資家に与えることによりひらかれるだろうと指摘した。

外人はユーゴ銀行に二十%の預金をしておけば、国外に利潤を持たすことが許されている。彼らは彼らの株式を他の外国の企業に売ることができる。ただしその際彼らはまずユーゴの会社に売りにださなければならない。

問題は意図でなく結果

この法律は若干ドラマチックな結果を生みだした。

フィアット―これはソ連の自動車工場へ技術と装置の大部分を供給している―は一千万㌦を、認可をうけてフィアット車を作っているユーゴの会社「赤い旗」に投資した。

当地で公表された情報によると、アメリカの会社はベオグラードグラフ印刷会社とともに、米国の超高速新プロセス装置を使ったカラー印刷のための共同投資をおこなった。

もちろんこれらすべてのことはユーゴに関してであって、チェコが同じ方向に進んでいることの証明にならないかもしれない。もっとも別の見解にしがみついている人を充分満足させるように証明することは明らかに不可能である。社会の現実を分析する仕事は、次第に支配的になっていく新しい発展が、意図的な人に無視されるかあざけられる小さな萌芽から発生している、という事実によって複雑化される。

誰にでもいえることは、チェコが既にユーゴによって開拓された道に従って、数ステップ以上歩き出し、侵入の何カ月か前の間には同じ方向に前よりも早い速度で動き始めたという兆候をみせていたということであろう。既にチェコにプラントをつくるために外国企業との提携が交渉されていた。（たとえば「ビジネス・ウイーク」八月二十一日号によるとイタリアのオイルトラストENIはチェコに化学工場を建設中である）

非常に多くの外国のビジネスマンがプラハに群がって、少なくともひとつのホテルは事実上彼らの専有物になっている。そしてプラハと西欧の金融センターの両方に執拗に流されている充分な根拠のある噂さによれば、五億㌦の貸付によってチェコは西側の最近の技術と装置を輸入することができるとのことである。多分これらのすべてはそれほど重大なことではないのかもしれない。あるいは市場に頼り資本主義国との密接な連携を発展させていく結果が、チェコではユーゴと別のものになるかもしれない。しかしそうならば、そういう結論を支える真面目な論文が現れてよいはずである。

ここで強調したいことは、チェコの改革者――あるいはこの点に関してはユーゴーの人さえ――が資本主義的志向を意識的に行なっているとか、彼らが民主的社会主義を達成するのだと称していることが偽善だとか、不誠実であるとかを意味していないということである。マルクス主義は人をその意図でなく行動で、そして行動の予測しうる結果によって判断すべきであると教えている。

問題は固ち、誰であろうと市場に対して抵抗するのでなく、市場を強化しようと振舞うものは、意図のいかんにかかわらず社会主義でなく、資本主義を推進しているのだということである。

こうした一連の問題について最も重要な（そして最も無視されている）マルキストの業績はE・プレオブラジェンスキーの「新しい経済学」（まず一九二〇年ソ連で出版され最近英訳が出版された。――オックスフォード大学出版部一九六五年）プレオブラジェンスキーは左翼反対派のメンバーでスターリニストのしゅく清の過程で処刑された。またユーゴ体制の分析については「社会主義から資本主義への平和的移行」マンスリー・レビュー一九六四年三月号参照。

チェコが資本主義へ移行しつつあるということから、ソ連の侵入が合理化されるであろうか？　絶対に否である。事実は、ソ連を含めた全東欧ブロックが既に、そして現にユーゴやチェコと同じ方向に移行しつつあるということである。これが程度と速度の差こそあれ、このブロックのすべてのメンバーをのみこんでいる経済改革運動の真の意味である。

どこでも旧い官僚的中央集権主義は困難の増大に直面している。大衆の無気力、生産性の停滞、経済的沈滞――あれこれのさし迫った危機の兆候は、全領域を通じて目立っていた。これには二つの可能な対応策があった。一つは中国がそれに与えたような特殊な意味での文化革命であった。大衆を発動し、政治的な自覚の一般水準を高め、社会主義の理想をよみがえ

（三面につづく）

私の発言

"堕ちよどこまでも堕ちよ"
大阪市教育委の汚職について

「堕ちよ、堕ちよ、どこまでも堕ちよ」

これはたしか坂口安吾のセリフだったと思う。そう思って、本棚の隅から『堕落論』をひっぱり出しカーキ色に変色した仙花紙をくってみたが、このことばは見当たらず、「生きよ堕ちよ」あるいは「人間だから堕ちるのであり、生きているから堕ちるだけだ」という割合い威勢のいい文句が目についただけだった。

しかも坂口のいう「堕ちる」とは、特攻隊の生き残りが闇屋になることであり、戦争未亡人が情事に身をまかすことであって、小役人が袖の下を使うことはとりあげられていない。思うに、ロマンティストを脱けきれなかった安吾は、「堕落」の中にもどこかに美のにおいをかがずにはおれなかったので、そういえば、白いマフラーと半長靴で闇市をのし歩く特攻帰りにも、若い恋人の胸に抱かれる未亡人にも、何か可憐な、人の心をそそる面影がある。その点になると、禿げ頭をペコペコ下げて賄賂を使う老いぼれ教師には、こぎたなさ以外の何ものも感じられない。それも、何千万という金が動いたというのであれば、ある種の爽快さもなくはないが、たった数万のはした金で目の色変えて右往左往する図を見せられては、犬の糞を踏んずけたときの、あのつばきを吐いてさっさと通りすぎる以外に手のない不快感を与えられるばかりである。坂口安吾がこの昭和四十年代まで生きのびたとしても、この汚職群像には一顧も与えることなく冷笑し去ったであろう、と考えられる。

昨年の夏、奈良の先生が五万円のギフト・チェックを贈ったとかで、検察庁に挙げられたと聞いたとき、私はミミッチイアホウドモと舌打ちしながら、「奈良県にあったことが私のところに全然ないとは考えられない」と思ったことを覚えている。われわれの所に飛火する前に、まず距離からいっても至当な大阪に火がつくのに半年とかからなかった。

今回の大阪市の場合、先生の元締めが肩を並べて、五万から十万のはした金を手ョコ、チョコ袖の下に入れるために、両手をさし出していたことが明らかになった。つまり「教育委員会」などと大ゲサな看板を掲げてはいるが、内実は校長の親分（ボス）のシンジケートに過ぎないことが、かなりはっきりした。教育長、柏原某の死が夕刊に出た日大阪の地下鉄の中で、市役所の吏員らしいのがうわさしているのを、私は耳にした。柏原さんは、人事のことでは自宅でも絶対に人と会わず、夜の宴会に一度も出たことがない、等々の高潔の士で、だから、部下の醜行には仰天するとともに、それを許したおのれを許せなかったのであろう、警察にやる気があれば網にひっかかるもの今の幾層倍にのぼること必至であるが、おそらくそうはようすまいとのことであった。

新聞、テレビによる情報からほとんど断たれて事件の細部を知らぬ私の目にも、ことの真相は明白である。いまの社会で、官憲の手入れがどんなにあっても、ヤクザの組織が壊滅しないように現在の教育のあり方からすれば、教師の汚職が永遠に尽きないことは確かである。文部省という大ボスから校長という小ボス、またそれに付随する弱小ボスに至る、縦の線が健在であるかぎり、上への貢物（有形とは限らない。たとえば教育実践という美名にかくれた点数取りもこれに含まれる。平は校長に、校長は市教委に、県教委は文部省に、これ見よがしの教育成果なるものをでっちあげて献上するのである。これは誰も非難せず、警察も手をつけないが故に、いっそう始末に悪い）は絶えることがない。

しかるに、事件はいつしか人間にすりかえられて嫁入り前の乙女のごとく廉潔を売りものにすることとで、めでたくことを運ぼうとしているもののようである。電車の中でちょっとのぞいた新聞紙に、大きな見出しで、「新教育長に、もらいぐせの無い人」とあったのには、吹き出さずにはおられなかった。「もらいぐせが無い」ことが、こんなに大きく取り立てられるに価する人間の資格であるとは、つい知らなかった。皮肉だとすれば、大ヒットである。教育の指導者になるためには、「もらいぐせが無」ければよいのである。そこで、世間の人は、教育という世界には、もらいぐせのある人がうようよしていてどうにもしようがないことを知らされる。しかもいくら「もらいぐせの無い人」を集めてみてもこのうようよしているどうしようもない連中は、押さえきれぬらしくて、人事管理にはコンピューターを使うそうである。人間は使用できず、とうとう機械に頼るしかなくなってしまったのだ。校長、教頭はコンピューターで選別せられ、教務主任は卓上電子計算器で計量される。そしてゆくゆくは、この点数一点が、いくらで売買されるようになるかもしれない。想うだに、愉快ながらも背筋が寒くなる。コンピューターといえども、人間の精神行動の一部始終、神のごとく観察して、お前はよし、お前はだめ、と断をくだすわけのものでなく、人間の注入したデーターを整理するにすぎぬものだろう。（科学音痴の私の考えることだから間違っているかもしれないが）では、そのデーターは誰が注入するのか、そのデーターにうそ偽りがないという保証はどこにあるのか、こうなればもうウソ発見器を使うほかはない。教育委員会、人事課にウソ発見器を並べておいて、校長にぜひなりたい御人を坐らせ、「あなたはやりぐせ、もらいぐせがないか」とたずねるのである。目盛りがピクリと動いて、五十以上をさせば合格、以下なれば失格。これでよろしい。

こう書いてくれば、ひとは私が今度の汚職に、非憤慷慨といかぬまでも、心よからず思っている、と考えるかもしれない。そうではない。私は実に楽しく嬉しいのである。これはいい、と思っているのである。先生はいったいなにやっとんのや、校長なんてほんまにしようのないやつや、とこれで少しは世間も考えるようになるだろうからである。この手の事件がもっともっと、あちらでもこちらでも明るみに出て、（必ず出る）しまいに、校長といえば、ああれは悪いことして人の上に立ちたい下衆野郎やと誰もが言うようになれば大したことではないか。断わっておくが、校長はしようがないけど、平はちがう、とうぬぼれるつもりは私には毛頭ない。この教育委員会のもとにこの校長あり、この校長のもとにこの平ありで、おいおい打って一丸となって教育そのものが疑われるようになるに違いない。生徒も父兄も、そうヘイヘイと頭をさげぬようになるに違いない。今度のことで、ある中学校の教頭は何かが網にひっかかり、どこかへ飛ばされたのに、「栄転だ」と全校生に訓示して生徒の憤激を買ったことが報道されていた。これはあまり厚顔無恥[illegible]いた特殊例にすぎないが、この種の事[illegible]れて、教師がなんだ、と詰め寄られるケースが今後ふえることは確かだ。

大学闘争を通じて、全共闘の学生が、現代の日本の教育の幻想部分を破壊しているとすれば、大阪市教育委員会のなんとか部長は、それにまして、教育の破壊に手を貸している。これは称賛に値する。牢獄から出てきたとき、拍手を以て迎えられるべきである。そして教育委員会から追放するなどというかけたことをせず、もう一度もっといいポストについてもらうべきである。こんな有能な破壊の戦士を野に置く手はない。

このたびのことで、これはいいと思ったことがもう一つある。やりとりされた金高のみみっちさである。通産省とか厚生省とか、近ごろ汚職はなかなか繁盛しているが、反問するところによると、それは百万単位が相場になっているらしい。それに比べ、数万円のギフト・チェックとワイシャツの仕立券づきは、あまりにお粗末すぎる。これは何よりも教師の生活の貧困の現われである。よいこと悪いこと、何をやらせても、口ほどにもなくみみっちく、ちゃちなのである。それほどに貧しい。これはわれわれの恥辱につながるゆえに、社会に対して訴えつづけられなくてはならぬ。

今回後ろに手の回った連中は、われわれに代って身をもってその貧困を呼ばわってくれたのである。そのへんの組合活動家よりも彼らの行為は偉大である。これが感謝なくしてすませられようか。

（教員 西谷治重）

京都市内をデモ行進する学生たち

5.23

バリ封鎖で激突
京大 大学立法粉砕の集会

大学治安立法粉砕の闘いが全国の大学でおこなわれた二十三日、前日におこなわれた京大全共闘による全学バリケード封鎖に対して奥田総長の退去命令が出されたのを契機に、一千五百の機動隊が朝七時に大学構内に乱入した。全共闘に結集する約七百人の学生たちは、催涙弾で襲撃する機動隊めがけて、石と火炎ビンで反撃し、京大周辺の道路にバリケードを築いて、二時間余にわたって激しい市街戦を行なった。この闘争で四十四人の学生が逮捕された。

機動隊の制圧下の大学に入ることを許された日共＝民青は、本部構内のバリケードをつぎつぎに破壊した。さらに午前十時には約五百の日共＝民青が、全共闘や各闘争委本部のある教養部構内に侵入し、各部屋を荒しまわったばかりでなく、大学の書類などをもちだし破壊するなど、略奪をほしいままにした。二十一日には日共＝民青は立命大で機動隊を先頭にして全共闘に投石し、ジュラルミンの盾をもった機動隊の横に鉄パイプをもった民青暴力団が並ぶという、まさに権力と一体となった姿をさらけだしたが、この日の彼らの行動は、いつも彼らが口にしている「自民党政府がトロを泳がせている」という言葉に対して「自民党政府と警察に泳がせてもらっているのは誰なのか」をまざまざと示すものであった。

この日午後二時半から京大時計台前で全関西学生総決起集会とデモがおこなわれた後、五時半からは京都反戦と各地区反戦が参加して「大学治安立法粉砕・愛知訪米阻止・ASPAC粉砕全関西労学総決起集会」が同じ場所でひらかれた。この集会には労働者、学生約二千人が参加した。この集会では京大全共闘、反帝全学連、中核派全学連、プロ学同、反帝学評、京都反戦、東山地区反戦、関西地区反戦連絡会議などの代表が発言した。各代表はともに大学法が七十年闘争圧殺を目前とした治安立法であることを強調し、大学法にあたかも反対するかのごときポーズをとっている日共＝民青の欺瞞性を暴露し、広範な学生大衆を結集し佐藤政府の巧妙な弾圧政策を粉砕するとともに、愛知訪米を阻止し、ASPAC川奈会議を粉砕して、沖縄・70年闘争勝利のため全力をあげて闘い抜く決意をのべた。

集会後円山公園までおこなわれたデモでは、並進する機動隊がデモ隊に挑発し暴行を加え、ならびに[illegible]学生たちはそれに屈せず、いかりをこめて、最後までデモを貫徹した。このデモで、四人の労働者、学生が不当に逮捕された。

4・28逮捕者を解雇
「守る会」三菱電機と対決

三菱電機伊丹製作所は、四・二八沖縄闘争に参加し、官憲によって不当逮捕された前原君を「懲戒解雇」した。この解雇に反対する三菱電機の仲間たちをはじめ、尼崎反戦青年委員会、松本鶴男弁護士などによって「前原君を守る会」がつくられ、全国の労働者と学生に支援共闘を呼びかけている。

四・二八中央闘争に参加し、国鉄線路上で逮捕された三百二十六名のうち、官憲は完全黙秘で闘っている三名を起訴し、残りを全員釈放した。

不当な逮捕に対する最大の抗議である黙秘をつらぬく三名のなかのひとり、前原君に対して、五月十六日会社は総務部長と課長の二名を東京へいかせ、接見禁止をかいくぐって前原君にあい「自発的に退職するなら、退職金も考える…」と恫喝しようとした。しかし彼がキッパリ拒否すると今度は二十日わざわざ飛行機で鹿児島へいき、田舎にいる彼の父と祖父に対して「解雇になれば息子さんの就職にもさしさわりがあるし、本人の再就職もむずかしい…」とおどかしをかけ、一緒に東京へつれていって面会させ、彼を自己退職させようとまでした。

前原君の英雄的な闘いに恐れをなした会社は、何とか内側から[illegible]しようとしたが、彼の堅い意志の前にこの陰謀がくずれさったとき「懲戒解雇」というダンビラをふりかざして真正面から、闘う労働者全体に対して恫喝をかけてきた。

このような政治活動による逮捕起訴を理由とする懲戒解雇が裁判所でさえ不当と判断していることをよく知っている会社は、労働協約に基づいて労組が協議申立てするのを恐れて、前原君の所属する[illegible]支部委員会がひらかれる前日、総務部労働課（非組合員）は各支部委員に圧力をかけ、労働組合に不当な介入をおこなった。

このため、[illegible]支部委員会は異議申立てをすべきことを多数で決定しておらず、現場では会社の不当な圧迫に対する反対の動きがつよまっている。（前原君を守る会＝尼崎市[illegible]）

帝国主義と対決する労働運動を
―七十年をめざす労働運動への提言―
陶山健一
発行 前進社 東京都豊島区東池袋二ノ六二ノ九 佐藤ビル
定価 一〇〇円（〒三五円）

労働者権力の形成めざして
根拠地 69―5
4・28から6月闘争へ
再編・合理化下の国鉄労働者
発行所 現代思想社 東京都豊島区池袋二ノ一〇二五
定価 一〇〇円 振替東京六九二三七

京都市内をデモ行進する学生たち

5.23

バリ封鎖で激突

京大 大学立法粉砕の集会

大学治安立法粉砕の闘いが全国の大学でおこなわれた二十三日、前日におこなわれた京大全共闘による全学バリケード封鎖に対して奥田総長の退去命令が出されたのを契機に、一千五百の機動隊が朝七時に大学構内へ乱入した。全共闘に結集する約七百人の学生たちは、催涙弾で襲撃する機動隊めがけて、石と火焔ビンで反撃し、京大周辺の道路にバリケードを築いて、二時間余にわたって激しい市街戦を行なった。この闘争で四十四人の学生が逮捕された。

機動隊の制圧下の大学に入ることを許された日共＝民青は、本部構内のバリケードをつぎつぎに破壊した。さらに午前十時には約五百の日共＝民青が、全共闘や各闘争委本部のある教養部構内に侵入し、各部屋を荒しまわっただけでなく、大学の書類などをもちだし破棄するなど、略奪をほしいままにした。二十一日には日共＝民青は立命大で機動隊を楯にして全共闘に投石し、ジュラルミンの楯をもった機動隊の横に鉄パイプをもった民青暴力団が並ぶという、まさに権力と一体となった姿をさらけだしたが、この日の彼らの行動は、いつも彼らが口にしている「自民党政府がトロを泳がせてる」という言葉に対して「自民党政府と警察に泳がせてもらっているのは誰なのか」をまざまざと示すものであった。

この日午後三時半から京大時計台前で全関西学生総決起集会とデモがおこなわれた後、五時半から京都反戦と各地区反戦が参加して「大学治安立法粉砕・愛知訪米阻止・ASPAC粉砕全関西労学総決起集会」が同じ場所でひらかれた。この集会には労働者、学生約二千人が参加した。この集会では京大全共闘、反帝全学連、中核派全学連、プロ学同、反帝学評、京都反戦、東山地区反戦、関西地区反戦連絡会議などの代表が発言した。各代表はともに大学立法が七十年闘争圧殺を目的とした治安立法であることを指摘し、大学立法にあたかも反対するかのごときポーズをとっている日共＝民青の欺瞞性を暴露し、広範な学生大衆を結集し佐藤政府の巧妙な弾圧政策を粉砕するとともに、愛知訪米を阻止し、ASPAC川奈会議を粉砕して、沖縄・70年闘争勝利のために全力をあげて闘い抜く決意をのべた。

集会後円山公園までおこなわれたデモでは、並進する機動隊がデモ隊に挑発し暴行を加え、なぐられて鼻血をだしたり、唇を切られるものなどがでたが、労働者、学生たちはそれに屈せず、いかりをこめて、最後までデモを貫徹した。このデモで、四人の労働者、学生が不当に逮捕された。

4・28逮捕者を解雇

「守る会」三菱電機と対決

三菱電機㈱は、四・二八沖縄中央闘争に参加し、官憲によって不当逮捕された前原君を「懲戒解雇」した。この解雇に反対する三菱電機の仲間たちをはじめ、尼崎反戦青年委員会、松本健男弁護士などによって「前原君を守る会」がつくられ、全国の闘う労働者と学生に支援共闘を呼びかけている。

四・二八中央闘争に参加し、国鉄線路上で逮捕された百三十六名のうち、官憲は完全黙否で闘っている二名を起訴し、残りを全員釈放した。

不当な逮捕に対する最大の抗議である黙否をつづける二名のなかのひとり、前原君に対して、五月十六日会社は総務部長と課長の二名を東京へいかせ、接見禁止をとかせて前原君にあい「自発的に退職するなら、退職金も考える…」と懐柔しようとした。しかし彼がキッパリ拒否すると今度は、二十日わざわざ飛行機で鹿児島へいき、卑劣にも彼の父と祖父に対して「解雇になれば弟さんの就職にもさしさわりがあるし、本人の再就職もむずかしい…」とおどかしをかけ、一緒に東京へつれていって面会させ、彼を口説き落とそうとまでした。

前原君の英雄的な行動に恐れをなした会社は、何とか闇から闇にほうむってしまおうとしたが、彼の堅い意志の前にこの陰謀がくずれさったとき「懲戒解雇」という大ダンビラをふりかざして真正面から、闘う労働者全体に対して恫喝をかけてきた。

このような政治活動による逮捕起訴を理由とする懲戒解雇が裁判所でさえ不当と判断していることをよく知っている会社は、労働協約に基づいて労組に異議申立てられるのを恐れて、前原君の所属する猪名野支部委員会がひらかれる前日、総務部某係長（非組合員）は各支部委員に圧力をかけ、労働組合に不当な介入をおこなった。支部委員会は異議申立てをしないことを多数で決定したが、京都支部では「異議申立てすべきである」と決定しており、現場では会社の不法な圧迫に対する反対の動きがつよまっている。（前原君を守る会＝尼崎市常光寺西之町二丁目三五松上辰之気付）

私の発言

〝堕ちよどこまでも堕ちよ〟

大阪市教育委の汚職について

「堕ちよ、堕ちよ、どこまでも堕ちよ」

これはたしか坂口安吾のセリフだったと思う。そう思って、本棚の隅から『堕落論』をひっぱり出しカーキ色に変色した仙花紙をくってみたが、このことばは見当たらず、「生きよ堕ちよ」あるいは「人間だから堕ちるのであり、生きているから堕ちるだけだ」という割合い威勢のいい文句が目についただけだった。

しかも坂口のいう「堕ちる」とは、特攻隊の生き残りが闇屋になることであり、戦争未亡人が情事に身をまかすことであって、小役人が袖の下を使うことはとりあげられていない。思うに、ロマンティストを脱けきれなかった安吾は、「堕落」の中にもどこかに美のにおいをかがずにはおれなかったので、そういえば、白いマフラーと半長靴で闇市をのし歩く特攻帰りにも、若い恋人の胸に抱かれる未亡人にも、何か可憐な、人の心をそそる面影がある。その点になると、禿げ頭をペコペコ下げて賄賂を使う老いぼれ教師には、こぎたなさ以外の何ものも感じられない。それも、何千万という金が動いたというのであれば、ある種の爽快さもなくはないが、たった数万のはした金で目の色変えて右往左往する図を見せられては、犬の糞を踏んずけたときの、あのつばきを吐いてさっさと通りすぎる以外に手のない不快感を与えられるばかりである。坂口安吾がこの昭和四十年代まで生きのびたとしても、この汚職群像には一顧も与えることなく冷笑し去ったであろう、と考えられる。

昨年の夏、奈良の先生が五万円のギフト・チェックを贈ったとかで、検察庁に挙げられたと聞いたとき、私はミミッチイアホウドモと舌打ちしながら、「奈良県にあったことが私のところに全然ないとは考えられない」と思ったことを覚えている。われわれの所に飛火する前に、まず距離からいっても至当な大阪に火がつくのに半年とかからなかった。

今回の大阪市の場合、先生の元締めが肩を並べて、五万から十万のはした金をチョコ、チョコ袖の下に入れるために、両手をさし出していたことが明らかになった。つまり「教育委員会」などと大ゲサな看板を掲げてはいるが、内実は校長の親分（ボス）のシンジケートに過ぎないことが、かなりはっきりした。教育長、柏原某の死が夕刊に出た日大阪の地下鉄の中で、市役所の吏員らしいのがうわさしているのを、私は耳にした。柏原さんは、人事のことでは自宅でも絶対に人と会わず、夜の宴会に一度も出たことがない、等々の高潔の士で、だから、部下の醜行には仰天するとともに、それを許したおのれを許せなかったのであろう、警察にやる気があれば網にひっかかるもの今の幾層倍にのぼること必至であるが、おそらくそうはようすまいとのことであった。

新聞、テレビによる情報からほとんど断たれて事件の細部を知らぬ私の目にも、ことの真相は明白である。いまの社会で、官憲の手入れがどんなにあっても、ヤクザの組織が壊滅しないように現在の教育のあり方からすれば、教師の汚職が永遠に尽きないことは確かである。文部省という大ボスから校長という小ボス、またそれに付随する弱小ボスに至る、縦の線が健在であるかぎり、上への貢物（有形とは限らない。たとえば教育実践という美名にかくれた点数取りもこれに含まれる。平は校長に、校長は市教委に、県教委は文部省に、これ見よがしの教育成果なるものをでっちあげて献上するのである。これは誰も非難せず、警察も手をつけないが故に、いっそう始末に悪い）は絶えることがない。

しかるに、事件はいつしか人間にすりかえられて嫁入り前の乙女のごとく廉潔を売りものにすることで、めでたくことを運ぼうとしているもののようである。電車の中でちょっとのぞいた新聞紙に、大きな見出しで、「新教育長に、もらいぐせの無い人」とあったのには、吹き出さずにはおられなかった。「もらいぐせが無い」ことが、こんなに大きく取り立てられるに価する人間の資格であるとは、つい知らなかった。皮肉だとすれば、大ヒットである。教育の指導者になるためには、「もらいぐせが無」ければよいのである。そこで、世間の人は、教育という世界には、もらいぐせのある人がうようよしていてどうにもしようがないことを知らされる。しかもいくら「もらいぐせの無い人」を集めてみてもこのうようよしているどうしようもない連中は、押さえきれぬらしくて、人事管理にはコンピューターを使うそうである。人間は使用できず、とうとう機械に頼るしかなくなってしまったのだ。校長、教頭はコンピューターで選別せられ、教務主任は卓上電子計算器で計量される。そしてゆくゆくは、この点数一点が、いくらで売買されるようになるかもしれない。

想うだに、愉快ながらも背筋が寒くなる。コンピューターといえども、人間の精神行動の一部始終、神のごとく観察して、お前はよし、お前はだめ、と断をくだすわけのものでなく、人間の注入したデーターを整理するにすぎぬものだろう。（科学音痴の私の考えることだから間違っているかもしれないが）では、そのデーターは誰が注入するのか、そのデーターにうそ偽りがないという保証はどこにあるのか、こうなればもうウソ発見器を使うほかはない。教育委員会、人事課にウソ発見器を並べておいて、校長にぜひなりたい御人を坐らせ、「あなたはやりぐせ、もらいぐせがないか」とたずねるのである。目盛りがピクリと動いて、五十以上をさせば合格、以下なれば失格。これでよろしい。

こう書いてくれば、ひとは私が今度の汚職に、非噴慷慨といかぬまでも、心よからず思っている、と考えるかもしれない。そうではない。私は実に楽しく嬉しいのである。これはいい、と思っているのである。先生はいったいなにやっとんのや、校長なんてほんまにしようのないやつや、とこれで少しは世間も考えるようになるだろうからである。この手の事件がもっともっと、あちらでもこちらでも明るみに出て、（必ず出る）しまいに、校長といえば、ああれは悪いことして人の上に立ちたい下衆野郎やと誰もが言うようになれば大したことではないか。断わっておくが、校長はしようがないけど、平はちがう、とうぬぼれるつもりは私には毛頭ない。この教育委員会のもとにこの校長あり、この校長のもとにこの平ありで、おいおい打って一丸となって教育そのものが疑われるようになるに違いない。生徒も父兄も、そうヘイヘイと頭をさげぬようになるに違いない。今度のことで、ある中学校の教頭は何かが網にひっかかり、どこかへ飛ばされたのに、「栄転だ」と全校生に訓示して生徒の憤激を買ったことが報道されていた。これはあまり厚顔無恥が怒りを招いた特殊例にすぎないが、この種の事件の頻発につれて、教師がなんだ、と詰め寄られるケースが今後ふえることは確かだ。

大学闘争を通じて、全共闘の学生が、現代の日本の教育の幻想部分を破壊しているとすれば、大阪市教育委員会のなんとか部長は、それにまして、教育の破壊に手を貸している。これは称賛に価する。牢獄から出てきたとき、拍手を以て迎えられるべきである。そして教育委員会から追放するなどというばかげたことをせず、もう一度もつといいポストについてもらうべきである。こんな有能な破壊の戦士を野に置く手はない。

このたびのことで、これはいいと思ったことがもう一つある。やりとりされた金高のみみっちさである。通産省とか厚生省とか、近ごろ汚職はなかなか繁盛しているが、反問するところによると、それは百万単位が相場になっているらしい。それに比べ、数万円のギフト・チェックとワイシャツの仕立券つきは、あまりにお粗末すぎる。これは何よりも教師の生活の貧困の現われである。よいこと悪いこと、何をやらせても、口ほどにもなくみみっちく、ちゃちなのである。それほどに貧しい。これはわれわれの恥辱につながるゆえに、社会に対して訴えつづけられなくてはならぬ。

今回後ろに手の回った連中は、われわれに代って身をもってその貧困を呼ばわってくれたのである。そのへんの組合活動家よりも彼らの行為は偉大である。これが感謝なくしてすませられようか。

（教員　西谷治重）

帝国主義と対決する労働運動を
―七十年をめざす労働運動への提言―
陶山健一
発行　前進社　東京都豊島区東池袋二ノ六二の九　佐藤ビル
定価　一〇〇円（〒三五円）

労働者権力の形成めざして
根拠地 69―5
4・28から6月闘争へ
再編・合理化下の国鉄労働者
発行所　現代思想社　東京都豊島区池袋二―一〇二五
定価　一〇〇円　振替東京六九二三七